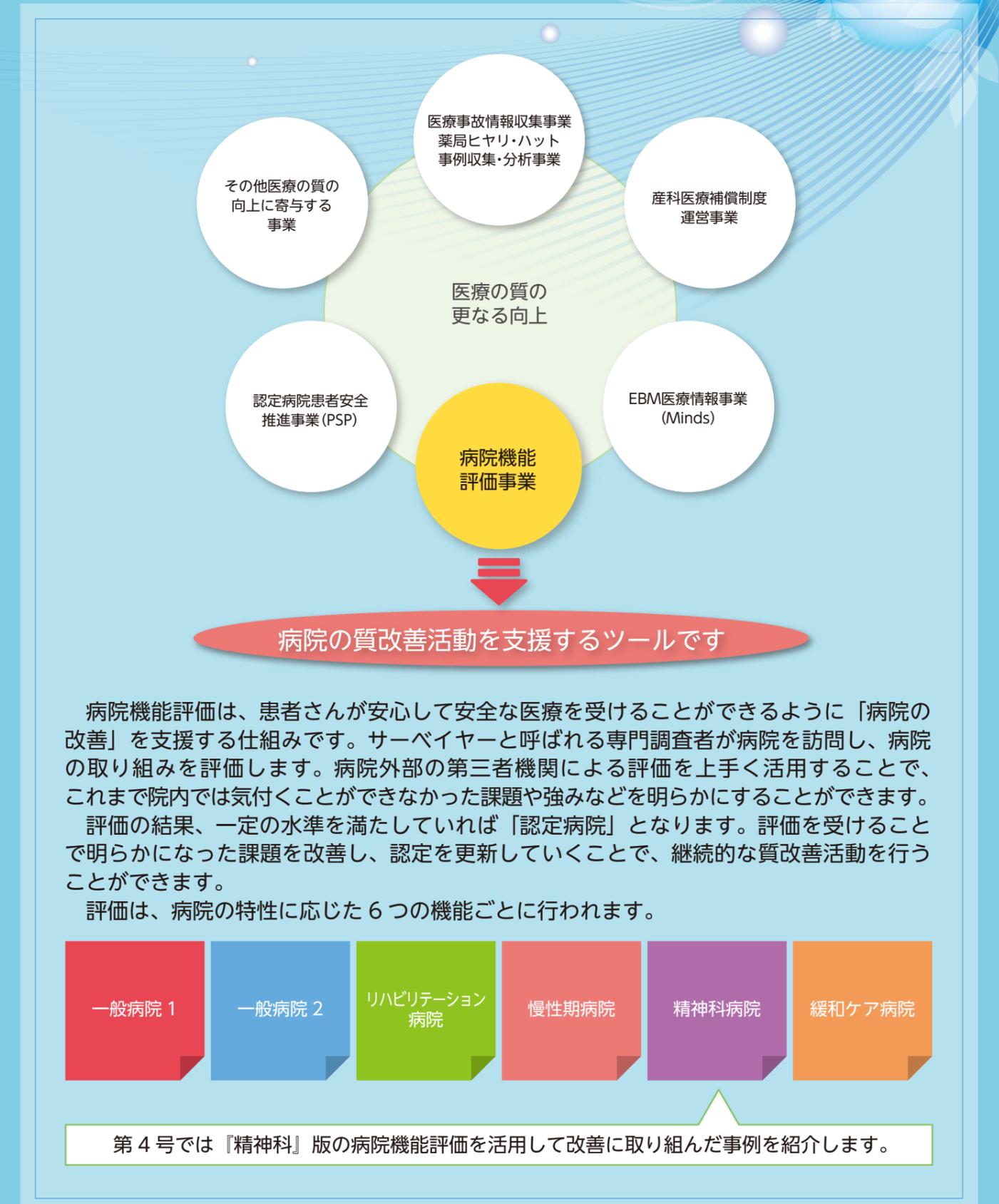


# 日本医療機能評価機構

日本医療機能評価機構は、国民の健康と福祉の向上に寄与することを目的とし、中立的・科学的な第三者機関として医療の質の向上と信頼できる医療の確保に関する事業を行う公益財団法人です。



## 認定病院の 改善事例紹介 シリーズ

Improve

Vol.4  
精神科病院

### 紹介事例

医療法人社団光生会

平川病院

「チーム一丸」となって患者の不安を取り除く

医療を見つめる第三者の目。

それが病院機能評価です。



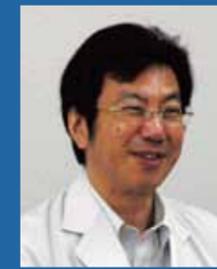
公益財団法人 日本医療機能評価機構  
Japan Council for Quality Health Care

<http://www.jcqhc.or.jp/>

# チーム一丸となって患者の不安を取り除く

## 医療法人社団光生会 平川病院の場合…

入院中に限らず退院後も、そして病院の中だけでなく地域でも…患者のためにチーム医療を展開する—平川病院の事例を紹介します。



患者からの電話で「おたくの理念は“患者の不安をとること”ですよな？」と言われると、私は「患者さんにまでうちの理念が浸透しているんだ！」と嬉しくなります。病院機能評価をきっかけにこの理念を掲げたことで、うちの職員は「院長にただついていく」のではなく、「理念をもって組織として動いていく」ようになったんです。やはり理念は組織運営上非常に重要だと思います。(院長)

### 誰もやらないのであれば うちでやる！



平川病院には、院長の方針として「誰もやらないのであればうちの病院でやるしかない」という強い想いがある。



「精神科の患者さんって、他の疾患の患者さんと同じ医療をなかなか受けられないんですよね。でも、精神科の患者さんだって同じように不安はあるんです。それで、どこもやらないのであればうちで診るしかないよねということで、リハビリをやったり、多職種チームで訪問看護を行ったりしているんです。」(看護部長)

精神科の患者も他の疾患の患者と同じように身体疾患を合併した際には治療やリハビリが必要だが、精神科単科でそれを実際に行っている病院は少ない。そこで平川病院では7年前に身体合併症病棟を作って身体疾患に対する治療、リハビリを行ってきた。

また、患者の地域生活を維持するためには、色んな職種の色んな機能が必要であるという考えから、訪問“看護”ならぬ、訪問“チーム医療”を行ってきた。地域で暮らす外来患者へのサービスを担っている職種・部門を束ねた「地域生活支援室」を設置し、チームで外来から入院、退院後の地域生活までを切れ目なく支援できるような体制をとっている。



多職種チームのカンファレンス

### 専門性の発揮されたチーム医療の展開



しかし、チーム医療と言っても、ただ多職種が集まればよいというわけではない。



「みんなで協力してやろうよと言っても、責任の所在を明確にして、誰かが覚悟を決めないと上手くいきません。例えば、何か起こった時に看護師さんが「これは骨折だから整形外科の先生かな？肺炎だから内科の先生かな？」など、誰に相談していいかわからない状況では多職種でやっている意味がありません。多職種の協働の中でもそういう“わかりやすさ”みたいなものが重要になってくると思います。」(合併症病棟担当医師)

平川病院において、自然とチーム医療が定着している背景には、この“わかりやすさ”がある。各職種がお互いを理解し、それぞれの役割を正しく認識しているからこそ、各職種が思う存分その専門性を発揮することができる。例えば、急性期病棟では、多職種がそれぞれの専門性を活かしながら疾病教育を行っている。

「コーピングは臨床心理士さんが専門、病態については医師が専門、ケアについては看護師さんが専門…というようにそれぞれが専門の観点で話すことで、患者さんの理解度も深まっています。」(急性期病棟担当医師)



「疾病教育にしても、クリニカルパスにしても、一緒にツールをみんなで共有できているということが大きいと思います。そういうツールを共有しているからこそ、one way のオーダーではなく、みんなでフラットに話し合うということもできているんだと思います。」(臨床心理士)

また、合併症病棟においても、他職種のフォローや協力体制があるからこそ、看護師たちはより患者の希望に沿ったケアを提供できている。

「私たちは、患者さんが「歩きたい」っておっしゃっていただければ、なるべく拘束せずに歩いてほしいって思います。でも、そうすると転ぶリスクが高くなります。その時にフォローをしてくれる体制があるからこそ、相談できる人がいるからこそ、歩いてもらうことができるんです。」(合併症病棟師長)



他職種と一緒に活動していると、自分一人、あるいは自分の部署だけでは思いもよらなかった解決策にたどり着くこともある。



「地域生活支援室では、医師、看護師、PSW、栄養士、薬剤師、臨床心理士、作業療法士、訪問看護、デイケア、グループホームの職員…本当に色んな職種で話し合いができるので、情報の共有から次の手が生まれるなど、実践に活かせることが増えました。」(急性期病棟師長)



地域生活支援室定例会議

### チーム医療だからこそできる “あきらめない”姿勢



みんなで話し合うと新しいヒントが見つかる。だからこそ、「あきらめない」という姿勢につながっている。

「うちの合併症病棟って、「あなたはもう歩けませんよ」って言われて来る人が多いんです。あきらめられて来る方が多いからこそ、私たちはあきらめられないんです。」(理学療法士)



平川病院では自分たちで線引きはせずに、「この患者さんはこういう機能があるから、こういうことをしてみよう」と、自分たちにできることを考えながらチャレンジし続けている。

そして、今や平川病院では当たり前となったチーム医療は、院内にとどまらず地域にも広がっている。

「退院後の地域生活の維持をどうバックアップできるかというところが常に課題になっていて、院長がよく話をしているんですけど、“病院が提供できるサービスを地域に配達する”ということをやより厚くできるようになればいいなと夢見ています。」(診療部長)



訪問看護



グループホームでの生活支援

# 病院機能評価受審の効果

これまではそれぞれが個別に想いを持っていたも、一人ではなかなか実行できないこともあった—そこを後押しして職種間の連携を形にしたのが「病院機能評価」でした。

## 病院機能評価って何だろう

平川病院はこれまでに病院機能評価を4度受審している。1998年の最初の受審時、当時主任だった現在の看護部長は、病院機能評価が何なのか全然わからなかったと話す。「機能評価が来るよって言うけど、「いつ来たの? いつ終わったの?」って感じでした。ただ手帳を渡されて「聞かれたらこれだけはちゃんと答えられるようにしなさい」って言われただけでした。」(看護部長)

## 病院機能評価が“きっかけ”に

2回目、3回目の受審の時はとにかく準備が大変だったが、気付かされることも多かったという。NST委員会ができたのもこの頃である。

「これまでは、看護師や栄養士がそれぞれにやりたいことがあっても、お互いに伝わっていませんでした。でも、病院機能評価の受審を機に今のNSTの活動を始めて、問題意識を各部署で共有できるようになりました。」(NST委員会担当医師)

NST委員会には、医師、看護師、管理栄養士、言語聴覚士、理学療法士、歯科医師・歯科衛生士、臨床検査技師が参加している。「多職種のチームになったことで、色々な専門職の目線での意見を聞いたうえでトータルに評価ができるようになった」(栄養士)、「誤嚥性肺炎が随分と減った。言語聴覚士などが入ることで食事の形態を速やかに変えるということも可能になった」(看護師)、「歯科が入ることによって嚥下内視鏡の検査ができるようになり、胃ろうからの経管栄養から経口摂取できるようになった患者さんもいる」(医師)など、多職種連携が改善につながっている。



NST委員会のメンバー

## 質の継続、そしてありのままの姿の評価

そして、4回目の受審の時は、気負って準備はせずに、自分たちが日常やっている様子をありのままに提示した。現場では「準備が大変だった」というよりは「自分たちがやっていることを話したくて仕方なかった」という。これまで病院機能評価をきっかけに積み重ねてきた改善活動が、切れ目なく継続し定着している姿が評価されたのである。

## 編集後記

東京都八王子市の緑豊かな山の中にその病院がありました。地域に溶け込んだその建物は、患者さんの地域生活を支えるという病院の姿勢を表しているようでした。

取材を終えてしばらく経ってから、取材に同行した当機構の高橋に「この病院の取材でどんな印象を受けましたか?」と尋ねたところ、「職員一人ひとりがすごく自立していました。ただ上から言われたことをやるというのではなく、それぞれが自分でしっかりと考えているような感じでした。だからチームとしてもああいう一体感が出ていたんだと思います」と話していました。

病院の広報誌「みやま」を読むと、毎回記事を書いている人が異なり、誰でも記事が書けるほど皆それぞれに想いをしっかりと持っていることがわかります。しかし、たとえ自分の考えがあったとしても、それを言葉にしたり文章にしたりするのはなかなか難しいものです。自分も想いを正しくアウトプットできるようになりたいと感じたと同時に、これからは病院の皆さんの想いを広く伝えていきたいと感じた取材でした。

(山内 みなみ)

## 病院概要

平成27年7月1日現在

病院名	医療法人社団光生会 平川病院		
理事長	平川 博之	院長	平川 淳一
所在地	〒192-0152 東京都八王子市美山町1076 TEL 042-651-3131 / FAX 042-651-3133		
開設	昭和41年7月		
病床数	349床		
標榜科目	精神科、心療内科、内科、歯科		

日本医療機能評価機構 認定病院の改善事例紹介シリーズ

Vol.4 精神科病院

2015年10月発行

発行：公益財団法人 日本医療機能評価機構  
〒101-0061 東京都千代田区三崎町1丁目4番17号 東洋ビル  
TEL：03-5217-2320(代) / 03-5217-2326(評価事業推進部)  
<http://www.jcqhc.or.jp>

